

# 『河海抄』の漢籍引用に関する一考察

——「尤物」の語と出典をめぐって——

大竹明香

## 一、はじめに

本稿では、『源氏物語』の注釈書のひとつである、『河海抄』について考察する。『河海抄』の注の特徴の一つとして、『源氏物語』本文の語に対して、『日本紀』や『万葉集』などから漢字の表記を指摘していることが知られている。例えば、『源註拾遺』「大意」には、以下のよう<sup>(1)</sup>にある。

此物語抄物の大部なるは河海その初坎。然るに暗記の違へる坎、草案坎、傳寫の誤坎、日本紀萬葉等にありとてひかれたる事の本書になき事すくなからず。後によき人く<sup>(2)</sup>のつゝきてつくり給へる抄とも、これを本にて、信すへき人のしたまへることなれば、いつれもつたへて根源を考かへすひかるゝほとに、た、此一書のみならず、假名物語に出来といてくる抄とも其あ

やまりをうけすといふ事すくなし。まことに本みたれぬは末をさまらすといふ事よろつにわたりてつゝしむへき事なり

『河海抄』は『源氏物語』の「抄物」としての初めか、とし、つづけて『河海抄』の注の「不詳」とされるものについて述べている。『源註拾遺』が指摘する「日本紀や萬葉等にありとてひかれたる事の本書になきことすくなからず」は、そのまま『源註餘滴』が、須磨卷の「おほやけのかうじ」に『河海抄』が「考辭日本紀」としているものを「契云日本紀に見へたることなし」として指摘するよう<sup>(3)</sup>に、『河海抄』がその出典として『日本紀』と明記している『日本書記』が、現存する『日本書紀』において、その多くが確認できないのである<sup>(3)</sup>。

この問題は、『河海抄』が引用する『日本紀』に限ったものではないよう<sup>(4)</sup>だ。『源註拾遺』ではその出典の明確にわからないものについて、「暗記の違へる坎、草案坎、傳寫の誤坎」とする見解を述

べている。本稿では、『河海抄』が注において指摘する漢籍引用について、また引用されている「語句」について考察してみたい。そして、その注が付されることによる『河海抄』の注のあり方を問うてみたい。

## 二、『河海抄』の漢籍引用

ここでとりあげるのは、『源氏物語』藤裏葉巻である。該場面(5)を、以下に引用する。

七日の夕月夜、影ほのかなるに、池の鏡のどかに澄みわたれり。げに、まだほのかなる梢どものさうさうしきころなるに、いたうけしきばみ横たはれる松の、木高きほどにはあらぬに、かかれる花のさま、世の常ならずおもしろし。例の弁の少将、声いとなつかしくて葦垣をうたふ。大臣、「いとけやけうも仕うまつるかな」とうち乱れたまひて、「年経にけるこの家の」とうち加へたまへる、御声いとおもしろし。をかしきほどに乱りがはしき御遊びにて、もの思ひ残らずなりぬめり。

(藤裏葉③四三九―四四〇)

藤裏葉巻の冒頭は、夕霧と内大臣(かつての頭の中将)家の娘雲居雁との結婚を認めるために、藤花の宴が催され、招待された夕霧

が出向いていくことが語られる。夕霧と雲居雁は、祖母大宮のもとで育てられ、互いに想い合う仲となったが、后がねとして入内することを望まれていた雲居雁は、父である内大臣によって、夕霧と長い間引き離されていたのであった。この藤花の宴は、事実上、内大臣が夕霧を婿として受け入れたことを意味している。当該場面は、宴も酣になり、弁の少将が「葦垣」を謡うのである。この催馬楽「葦垣」の歌詞は以下である。(6)

葦垣真垣 真垣かきわけ てふ越すと 負ひ越すと たれ  
てふ越すと 誰か誰か このことを 親に申よこし申しし

とどろける この家 この家の 弟嫁 親に申よこしけらしも  
天地の 神も神も 証したべ 我は申よこし申さず  
菅の根の すがな すがなきことを 我は聞く我は聞くな

(催馬楽)

弁の少将の謡ったことを受けた、内大臣の言葉では、「とどろける この家の」が「年経にけるこの家の」に変えられる。「葦垣」は男が女を背負って真垣を踏み越えようとしたところを、告げ口されたという内容を謡っているもの。そのために内大臣は、「妙な歌をお聞かせになつて」として、言葉を入れ替えたのだ。

先の引用にみえる「いとけやけうも」の語について、『河海抄』は次のように施注する。(7)なお、便宜上引用箇所を簡条書きにし、番

号を付す。

①常尤<sup>ケヤク</sup> 文選

②選梨園弟子中尤物 李白詩後序

③由来尤物不在大能蕩君心則為害白氏文集 八駿図

④世間尤物難留連々々易銷塞北花江南雪 同 真姬墓

⑤意者不但感其事亦欲懲尤物 長恨哥伝 陳鴻

①から⑤の一連の注において、「尤」の字が見受けられることに注意しよう。ここでは、とりわけ②の引用について詳しく見ていきたい。なぜなら、②については出典が明確にわからないからである。②の本文の出典については、以下三点の漢籍が考えられるものである。

A 『太平廣記』<sup>(8)</sup> 卷第二〇四 又

開元中。禁中初重木芍藥。即今牡丹也。開元寶花木記云。禁中呼木芍藥為牡丹。得四本。紅紫淺紅通白者。上因移植於興慶池東沈香亭前。會花方繁開。上乘照夜白。太真妃以步輦從。詔特選梨園弟子中尤者。得樂十六部。李龜年以歌壇一時之名。手捧檀板。押衆樂前。將歌之。上曰。賞名花。對妃子。焉用舊樂詞為。遂命龜年持金花牋。宣賜李白。立進清平調辭三章。(中略)

上自是顧李翰林。尤異於他學士。會高力士終以脫靴為深恥。異日。太真妃重吟前詞。力士戲曰。此為妃子怨李白。深入骨髓。何反拳拳如是。太真因驚曰。何翰林學士能辱人如斯。力士曰。以飛燕指妃子。是賤之甚矣。太真頗深然之。上嘗三欲命李白官。卒為宮中所捍而止。出松廳錄

B 『楊太真外伝』<sup>(9)</sup> 上の巻

先、開元中、禁中重木芍藥。即今牡丹。(開元天寶花木記云。禁中呼木芍藥為牡丹也。)得數本紅紫淺紅通白者、上因移植於興慶池東沈香亭前。會花方繁開。上乘照夜白、妃以步輦從。詔選梨園弟子中尤者、得樂十六部。李龜年以歌壇一時之名。手捧檀板、押衆樂前、將欲歌之。上曰、賞名花、對妃子、焉用舊樂詩為。遂命龜年持金花牋、宣賜翰林學士李白、立進清平樂詞三篇。承旨、猶苦宿醒、因援筆賦之。(中略)

龜年俸詞進、上命梨園弟子略約詞調、撫糸竹、遂促龜年以歌。妃持玻璃七宝杯、酌西涼州葡萄酒、笑領歌、意堪厚。上因調玉笛以倚曲。每曲編將換、則遲其声以媚之。妃飲罷、斂繡巾再拜。上自是顧李翰林尤異於他學士。會力士終以脫靴為恥。異日、妃重吟前詞、力士戲曰、始為妃子怨李白深入骨髓、何翻拳拳如是耶。妃子驚曰、何學士能辱人如欺。力士曰、以飛燕指妃子、賤之堪矣。妃深然

之。上嘗三欲命李白官、卒為宮中所捍而止。

C 『詩林廣記』<sup>(10)</sup> 卷之三

清平調辭三章

其一

雲想衣裳花想容春風拂檻露華濃若非群玉山頭見會向瑤臺月下逢

其二

一枝紅豔露凝香雲雨巫山枉斷腸借問漢宮誰得似可憐飛燕倚新粧

其三

名花傾國兩相歡長得君王帶笑看解釋春風無限恨沉香亭北倚欄干

李白集後序云開元中禁中初重木芍藥即今牡丹也得四本紅紫淺  
通白者上因移植興慶池東沉香亭前會花繁開上乘照夜車眞妃以步  
輦從詔選梨園弟子中尤者得樂十六色李龜年以歌名檀一持捧檀板  
將前歌之上曰賞名花對妃子何用舊樂辭遽命持金花牋賜翰林李白  
立進清平調辭三章白欣然承詔援筆賦之龜年以歌辭進上命梨園弟  
子略約調撫絲竹促龜年歌之眞妃持玻璃七寶杯酌西涼州葡萄酒笑  
領歌辭意甚厚也上因調玉笛倚曲每遍將換則遲其聲以媚之眞妃飲  
罷斂繡巾重拜上自是顧李翰林尤異於諸學士矣

Aで引用した『太平廣記』の本文は、「李龜年」の次に「又」として並べられているものである。これは末尾に「出松臆録」とあり、  
出典を『松臆録』としている。李白について、また「清平調詩」に

ついでの内容であるが、『河海抄』にある「李白詩後序」の記述と  
の関わりが明白にはわからないため、ここでは措く。

Bの『楊太真外伝』は、『漢籍解題事典』によると、「宋の文言小  
説。樂史（九三〇—一〇〇七）撰」とあり、版本は「<sup>(11)</sup>顧氏文房小  
説」（清の乾隆五十七年（一七九二）刊）、『唐人說薈』（清の道光二  
十三年（一八四三）刊）、魯迅『唐宋伝奇集』（一九五二、北京人民  
出版社刊）等がある。訳注に、竹田晃・檜垣馨二『緑珠伝・楊太真  
外伝・夷堅志他』（中国古典小説撰、明治書院、二〇〇七年）があ  
る」とある。またCの『詩林広記』については「詩話集。南宋の蔡  
正孫（一二七九前後在世）の撰。二十卷。正孫の字は粹然、自ら蒙  
齋野逸と号した。自序によれば己丑（元の世祖の至元二十六年（一  
二八九）の作。前集十卷には、陶淵明・杜甫・李白（中略）等二  
十八人を選び、詩・詩話を載せている。陳眉公秘笈本は前後合わせ  
て四卷とする。日本では宇都宮由的が前集、鶴飼眞昌が後集に校点  
を施し、寛文八年（一六六八）中野吉右衛門が刊行している」とあ  
る。

現在見ることのできる『詩林広記』のテキストとしては『和刻本  
漢籍隨筆集 第十八輯』があり、これは寛文八年跋刊本である。長  
澤規矩也氏の解題には、「首に弘治十年（一四九七）張籛の序を自  
序の前に掲げた。即ち、この弘治刊本が和刻本の祖本であらう。そ  
の弘治十年序刊本といふものは靜嘉堂文庫藏書中にあり、舊板が摩  
滅したので、濟南の張籛が子に命じて校正せしめて、半閑堂に刊し

た本である」とある。

どちらも成立は宋代であるから、日本に入ってきていければ『河海抄』が見ることができた可能性がある。ここで問題としたいのは、『河海抄』の引用には「李白詩後序」と明記されていることである。これは、『詩林広記』にある「李白集後序云」に近いものであろうか。

だとすれば、この『詩林広記』を『河海抄』が見られた可能性があるかどうかを考える必要があるだろう。

### 三、『詩林広記』と『梅花無尽蔵』

日本における『詩林広記』の享受は、どのようなものであったのか。そのことを文学作品における『詩林広記』の引用から確認してみたい。

『和刻本漢籍隨筆集』は寛文八年跋刊本であるから、『漢籍解題事典』にある説明に相違ないものである。では、「和刻本の祖本であらう」と長澤氏のいわれる弘治刊本は、どのように享受されていたのだろうか。中世期の文学作品の中から、五山文学について、『詩林広記』との関わりを見ていく。

参照されるのは、『詩林広記』についての、五山文学作品の『梅花無尽蔵』である。『梅花無尽蔵』は万里集九の記した詩文集である。万里集九はおおよそ、室町末期から戦国時代にかけて活躍した

人物だ。

そこで、『梅花無尽蔵』の本文をあげ、詳しく考察したい。なお、『梅花無尽蔵』引用は、先行研究においては『群書類従』から引くものがほとんどである。しかし、『群書類従』本には、第七のはじめ以降の本文が欠けている。従って本稿においては、『五山文學新集』<sup>(12)</sup>から本文を用いる。また引用にあたっては、『群書類従』<sup>(13)</sup>及び、『梅花無尽蔵注釈』<sup>(14)</sup>も参照した。

### 三下 明應七年戊午

柳塘春水 元宵前一日、南豊方丈會、住持鑑湖月、

續群書類従本「愈」字ヲ「熊」ニ二様「字」録ニ作ル

梅丈詩開山祖師、柳塘春水讚談來、萬條金縷波肥後、結作黃衣

獻住持、劉後村、梅「丈」尙愈詩、爲宋詩之開山祖師、詳見群林廣記後梅聖愈之說、聖愈亦許嚴維柳塘春水漫、花坊夕陽暈之聯、見(一、)

ここでは割注において『詩林広記』の書名が確認できる。

『梅花無尽蔵』の注については、例えば、中川徳之助氏が、本文中に記されている注についてこれが自注であるのか、あるいは後代の者の注であるのかを考える必要があることを述べている<sup>(15)</sup>。氏によれば、新井白石と安積澹泊との往復書簡である『新案手簡』には、多くの自注の他に「本光国師」の注もまじっていると記述が見え、この「本光国師」とは、江戸時代始めの以心崇伝を示しているという。したがって、『梅花無尽蔵』の注記には、以心崇伝の書き入れ

も混じっているということになる。この書き入れが疑われる箇所は、三箇所ほどあるのではないかと指摘されている。

中川氏は、万里集九の創作態度についての考察において、この自注か否かについても触れており、結論として「ほとんどが万里自身の手になるものとわたくしは考えている」と述べている。この『梅花無尽蔵』の自注に関する問題については、小野泰男「五山文学の自注―『梅花無尽蔵』を中心に―」において、中川氏の論を踏襲しつつ「自注」として論じられている。<sup>(16)</sup>

先にあげた『梅花無尽蔵』の「柳塘春水」にある傍線部を含む注については、『新案手簡』において指摘されている三箇所には含まれていないものである。これが万里集九の自注であるとすれば、万里集九は『詩林広記』を読んでいた、ということになる。

これについては、内山精也「万里集九と宋詩」において、万里や五山僧の多くが「蘇黄」、蘇軾と黄庭堅の作品を愛読していたこと、くわえて、『梅花無尽蔵』には、「蘇黄」の他にも宋代詩人の名が多く見られ、万里は広く宋代全体の詩を愛読していたと述べ、以下のように指摘している。<sup>(17)</sup>

では、万里はこれほど多くの宋代詩人の作品を、如何にして知りえたのであろうか。「蘇黄」および陸游、楊万里については、いずれも五山における翻刻本（五山版）が現存する。よって万里にとっても入手困難ではなかったに違いない。

その他の詩人の作品や逸事の多くは、おそらく『若溪漁隱叢話』前後集、『詩人玉屑』、『詩林広記』前後集等の詩話総集や、『唐宋聯珠詩格』、『古文真宝』等の作詩作文教本を情報源としていたようである。この中、『若溪漁隱叢話』は南宋初期の成立で北宋末までの詩人を対象とする詩話集である。その他はすべて南宋末から元初かけて作られ通行したテキストで、南宋の作品をも収録する。『詩人玉屑』、『唐宋聯珠詩格』、『古文真宝』の三書には五山版があり（川瀬一馬『五山版の研究』一九七〇年）、五山僧にとって、もっともポピュラーな漢詩漢文の教材であった。（残りの二書については、『梅花無尽蔵』に言及がある）。

右のわたくしに傍線を付した箇所にあるように、『梅花無尽蔵』における注に見える『詩林広記』の書名は、万里集九が『詩林広記』を読んでいたことを示しているものと解釈されることが見てとれよう。

次に『詩林広記』において李白に関する事柄がどのように詠まれているのか、及び李白の「清平調詩」に関する詩を見ていく。

### 三下 清平調

一斗百篇盃不乾、誤編仙部太無端、開元新澤清平調、金粟如來說牡丹、三日

三下 李太白醉畫賛 序見第七

春醉鬚香喚不驚、烏靴聲向御前輕、朝青蓮又暮金粟、一斗盃支筴并、

三下 紅牡丹圖

沈香亭北笛摧盃、四種牡丹紅獨開、從唱清平新曲調、五雲上置翰林才、

七 題大白醉象圖詩序 詳見第三下、

潮州迦葉司馬、問李大白、以李大白以其爲人、大白自答、有一絕云、青蓮居士謫仙人、酒肆藏名三十春、湖州司馬何須問、金粟如來是後身、蓋周汾陽所誦拗体者也、蒙齋方寸翁所編詩格載之、第一二之兩句鷓倒、以爲正体、實有據乎哉、青蓮居士、即大白之自號也、發迹經曰、淨名大士是往古金粟如來云々、大白星其後身也、開元中、沈香亭四種之牡丹、各媚春也、大白時爲翰林學士、進清平調三篇、眞妃持玻璃七寶之盃、酌西涼州葡萄之酒、三郎因吹玉笛數聲、遂及高將軍以飛燕之叟、（讚九） 眞妃、且似無端哉、今不拘本傳、而齋所自號之一而已、

これら四詩はいずれも李白に関する事柄を詠んだものである。特に「題大白醉象圖詩序」は、李白の「清平調詩」について、『舊

唐書』や『新唐書』などの正史にはない事柄を、万里集九が自ら詩に詠んでいる。また、はじめの傍線部には『詩林広記』を記した蔡正孫の名が見える。ただし、二重線部については、『詩林広記』には見られないので、例えば、『唐才子傳』<sup>(18)</sup>や『太平廣記』、『楊太真外伝』などを参照したのではないかと考えられる。「今不拘本傳、而齋所自號之一而已」、「本傳」（正史）には無いものも、万里自身がここに付け加えた、と述べている。

このように『梅花無尽蔵』には、李白及び「清平調詩」に関する事柄を詠じているものがいくつも確認できる。さらに、これは『舊唐書』や『新唐書』などの正史にはないものも含まれている。以上のことから、万里集九が『詩林広記』やその他の漢籍に十分触れる機会があったことが推測できるのである。

#### 四、『河海抄』の「尤物」について

話を『河海抄』にもどそう。『河海抄』は四辻善成が記した『源氏物語』の注釈書で、貞治年間（一二三六―一二三六）に成立したものである。<sup>(19)</sup>『河海抄』の注の特色として、『源氏物語』本文に対して、徹底して准拠を求める姿勢や、和語に対して漢語を用いて注を付けることなどがあげられる。<sup>(21)</sup>その中には、知られているとおり、膨大な漢籍の引用が見受けられるのである。

本稿で問題としている『源氏物語』の藤裏葉巻の「いとけやけう

も」についても、『河海抄』は①から⑤まで、全て漢籍から引用している。①の『文選』は第十七卷、陸士衡「文賦并序」にある以下の部分<sup>(22)</sup>で、

普<sub>レ</sub>辭條余<sub>二</sub>文律<sub>一</sub>、良余膺之所服。練<sub>二</sub>世情之常<sub>レ</sub>尤<sub>一</sub>、識<sub>二</sub>前脩之所<sub>レ</sub>淑。

つづく③④は、『白氏文集』所収の以下の詩の一節である。

#### 八駿圖

由來<sub>レ</sub>尤物不<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>大。能蕩<sub>二</sub>君心則爲<sub>レ</sub>害。

#### 眞娘墓

世間<sub>レ</sub>尤物難<sub>二</sub>留連<sub>一</sub>

難<sub>二</sub>留連<sub>一</sub> 易<sub>二</sub>銷歇<sub>一</sub>

塞北花 江南雪

また⑤は、陳鴻撰の『長恨歌伝』の一節である。

樂天因爲<sub>二</sub>長恨歌<sub>一</sub>。意者不<sub>レ</sub>但感<sub>二</sub>其事<sub>一</sub>、亦欲<sub>レ</sub>懲<sub>二</sub>尤物<sub>一</sub>、窒<sub>二</sub>亂階<sub>一</sub>、垂<sub>中</sub>於將來<sub>上</sub>也。

ところで『河海抄』には「けやけし」の語について、この藤裏葉巻以前にも言及していた。初音巻に見える以下の叙述についての注である。

いとどなまめかしさ添ひてなつかしければ、新しき年の御騒がれもやとつつましけれど、こなたにとまりぬ。なほ、おぼえことなりしかど、方々に心おきて思す。南の殿には、ましてめざましがる人々あり。

まだ曙のほどに渡りたまひぬ。かくしもあるまじき夜深さぞかしと思ふに、なごりもただならずあはれに思ふ。待ちとりたまへる、はた、なまけやけしと思すべかめる心の中はばかられたまひて、「あやしきうたた寝をして、若々しかりけるいぎたなさを、さしもおどろかしたまはで」と御気色とりたまふもをかしく見ゆ。  
(初音③一五〇—一五一)

これは、光源氏の六条院造管後初めて迎える新年早々の場面である。主人たる光源氏は、冬の町に住まう明石の君のもとに泊まるのである。明石の君とは、光源氏の一人娘を産んだ女君であるが、受領の娘であるため、この時はわが子の養育を紫の上へ託すよりほかない状況であった。六条院に住まう女君たちの序列を考えれば、明石の君のおかれる状況は、新年早々光源氏が一晚を過ごすに値しないものである。そのため、他の女君たち、また春の町に住まう紫の



上付の女房たちの心情が語られ、すなわちそれは、紫の上の心情をも想像させるものであるため、傍線部、紫の上の心の中は「はた、なまげやけしと思す…」と光源氏は思うのである。『河海抄』は以下のように説明している。

まちとり給へるはたなまげやけしとおほす

① 好ケヤケシ物十二尤者同廿六けやけしと善悪につけてすさましくおそきやうなる心也（美事心歎）すくれなからも也（美事心歎）ほけくとしたるすかたにはあらぬ也

② 選梨園弟子中尤物李白詩後序

③ 由来尤物不在大能蕩君心則為害白氏文集八駿図

④ 世間尤物難留連々々易銷塞北花江南雪同真姫墓

⑤ 意者不但感其事亦欲懲尤物空乱階垂於將來也（陳情）  
大鏡云古今撰せられしおり貫之を召いたして和哥つかうめつらしめ給けり

こと夏はいか、泣けん時鳥このくれはかりあやしきはなし  
これをたにけやけきこと、思いたまへしにとあり

②から⑤の引用は、この初音巻と先の藤裏葉巻とは一致する。こうした反復から、何が読みとるべきなのだろうか。これら『河海抄』の引用する漢籍は、何を示しているのだろうか。

当該箇所『河海抄』の引用については、河野貴美子氏が、『白

氏文集』を意識した『河海抄』の読みを提示する姿勢を指摘している。<sup>23</sup>確かに、多くは白居易の詩の引用が目立つ。ただここでは、『白氏文集』に関わる漢籍の引用の前にある、「李白詩後序」として引用される「選梨園弟子中尤物」の部分に、注目したい。『河海抄』はなぜ、「選梨園弟子中尤物」の一文を引用したのであるうか。当該箇所について、さらに詳しく検討しておこう。

まず、①から⑤のうち、①のみに「ケヤケシ」と訓が付してある。『日本国語大辞典』<sup>24</sup>には「けやけしい【尤】①著しく普通とは異なっている。異様できわだっている。」と説明されており、『大漢和辞典』<sup>25</sup>によれば、「常尤」は「あたりまへのとが。普通の過失。尤は過。」とあり、『源氏物語』本文の「いとけやけうも」の「けやけし」に対する「尤」の字の訓を示しているものであろう。ではつづ②から⑤はどうだろうか。②③④⑤は全て「尤物」となっているものである。こちらでもまず『日本国語大辞典』から見てみる。「ゆうぶつ【尤物】①すぐれたもの。めだつ代表的なもの。」つづいて『大漢和辞典』には「①すぐれてよいもの。逸品。②美人。美女。」とある。したがって、①と②③④⑤は少々言葉の意が異なっている。①は『源氏物語』の本文に対応しているといえるが、②③④⑤は対照的に、すぐれているもの、美しいものの意を示しているものである。

さらに、②は『河海抄』においては「尤物」となっているが、『楊太真外伝』や『詩林広記』においては、「物」ではなく「者」となっ

ている。なお、『四庫全書』所収『李太白集注』卷三十、同卷三十五、集分類補同『李太白註』別集序などにも、全て「者」となっている。<sup>(26)</sup>これははたして『河海抄』の間違いかといえ、必ずしもそうとは言えない。「尤物」として引用をそろえているところに、『河海抄』の意図を見るべきではなからうか。なお、河野氏は、当該箇所引用について、清代の王琦が編んだ『李太白文集』<sup>(27)</sup>に以下の序文が収録されていることを述べている。

#### 卷之三十一、附録一、李翰林別集序

朝散大夫尚書職方員外郎直史館上桂國樂史述

詔選梨園弟子中尤者得樂一十六色。

序文は巻首に残される場合と巻末に移される場合とがあるため、『河海抄』にある「後序」とは、この樂史述の「李翰林別集序」を示していることもたしかに考えられる。いっぽうで、明確に「李白集後序」とあることを重くみるならば、『詩林広記』ではないだろう。うか。

Cで引用した『詩林広記』の該当箇所には「詔<sup>シ</sup>選<sup>テ</sup>梨園<sup>ノ</sup>弟子<sup>ヲ</sup>尤<sup>キ</sup>者<sup>ヲ</sup>」とあり、寛文八年跋刊本には、「ケヤケキ」と訓がある。ここからはあくまでも推測に過ぎないが、『河海抄』はこの「ケヤケキ」という訓によって該当箇所の引用をしているのではないだろうか。ただし、繰り返しになるが、『河海抄』の理解として、ここ

では「者」ではなく「尤物」として、注をそろえている。<sup>(28)</sup>つまり『源註拾遺』が述べる「然るに暗記の違へる坎、草案坎、傳寫の誤坎」とされたごとき、暗記の違いや伝写の違いなどではなく、ここに『河海抄』の注の姿勢を看取してもよいのではないかと考えられるのである。そして、刊本の『詩林広記』が「ケヤケモノ」と訓読しているように、仮に『河海抄』が『詩林広記』のテキストを見ていたとすれば、「訓を付す」という『河海抄』の注の特徴に、該当箇所も加え得る可能性があるとも考えられよう。

くわえて、このあたりの注は、白居易の『白氏文集』を中心として、「長恨歌」に関する漢籍の出典が目立つ。②の引用に関していえば、「ケヤケキ」との訓読にくわえて、玄宗皇帝と楊貴妃にまつわる李白の「清平調詩」に関する外伝であり、また⑤も「長恨歌伝」であるから、やはり『河海抄』の意識するところに、「尤物」、楊貴妃の物語があつたのではないだろうか。楊貴妃と「尤物」の語については、柳瀬喜代志氏の論に詳細な指摘がある。柳瀬氏の、「復古」の詩と長恨歌傳・鶯鶯傳に見える楊貴妃の像―「尤物」―という語をめぐって―には以下のようにある。<sup>(29)</sup>

―樂天は、そこで長恨歌を作った。その意圖は、ただそのことに感歎するだけではない。「尤物」を懲し、「亂階」を防ぎたいと思ひ、その意を將來に傳ようとしたのだ。―

「尤物」をこらしめる、懲悪によって世の亂れのもとを將來

に防ぐために「長恨歌」は作られたと解説する。「亂階」は、詩經、小雅の巧言篇に見える語である。「長恨歌」の創作の目的が儒家の經典に見える「尤物」、「亂階」の二語で示されていることは、「復古」の意識のありかたをも示している。

楊貴妃が「尤物」という呼称と結びついて、文学作品に描かれるようになる背景がここでは示唆されているだろう。

そのような流れの中で、『河海抄』の「げやけし」に関する理解も捉えることができるのではないか。「尤」を「ケヤケキ」と訓読している点に、「尤物」の語への意識を読みとると、そのようにも思えてくるのである。

## 五、まとめと課題

以上、『河海抄』の注について考えてきた。『河海抄』の研究については、先にも触れた吉森佳奈子氏や松本大氏に詳細な論がある。吉森氏は『河海抄』の漢詩引用について、『河海抄』を通して、漢籍が故事的に流布してゆく空間があらわし出されてくる<sup>(30)</sup>ことを述べている。本稿で見たことも、『河海抄』の漢籍受容の一環として理解してよからう。「長恨歌」や「長恨歌伝」は例えば『太平記』にも見えるものである。<sup>(32)</sup>『源氏物語』の藤裏葉巻の該当場面の理解において、『河海抄』の中に楊貴妃に関する漢籍への意識がある可

能性は十分考えうるのではなからうか。

最後に今後の課題についても触れておく。『源氏物語』藤裏葉巻の「七日の夕月夜」に対して『河海抄』は、「月七日為魄 初学記」との注を付けている。しかし、『初学記』には合致する記述はなく、「人日」の項に、「正月七日為人日」とある。これもまた単に『河海抄』の間違いと片付けてよいものかどうか。さらに考えていきたいと思う。

## 注

- (1) 引用は、『契沖全集』第九卷（岩波書店、一九七四）による。
- (2) 市島謙吉編『源注餘滴』（國書刊行會、一九〇六）二一〇頁。
- (3) 吉森佳奈子『河海抄』の『源氏物語』（和泉書院、二〇〇三）に詳しい。
- (4) 例えば、松本大『河海抄』の『万葉集』引用考―『紫明抄』との比較から（『学芸古典文学』第一号、二〇〇八、三）など。
- (5) 以下『源氏物語』本文は、『新編日本古典文学全集』（小学館、一九九八）から引用した。○内は巻名・巻数・頁を示している。
- (6) 引用は、『日本古典文学全集』（小学館、一九七六）による。
- (7) 『河海抄』の引用は、玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』（角川書店、一九六八）底本「文禄本」による。必要に応じて、「天理本」、天理圖書館善本叢書叢書之部編集委員会編『天理圖書館善本叢書叢書之部第七十一卷河海抄傳兼良筆本二（八木書店、一九八五）及び、室松岩雄編『河海抄・花鳥余情・紫女七

論』(國學院大學出版部、一九〇八) 底本「宮内省圖書寮本」を参照した。

- (8) 引用は、李昉等編『太平廣記』(中華書局、一九六一)による。
- (9) 以下、引用は竹田晃・檀垣馨二『緑珠伝・楊太真外伝・夷堅志他(宋代)』中国古典小説選七(明治書院、二〇〇七)による。訓読もこれに依った。
- (10) 引用は、長澤規矩也解題『和刻本漢籍隨筆集 第十八集』(汲古書院、一九七七)による。
- (11) 内山知也『漢籍解題事典』新釈漢文大系別巻(明治書院、二〇一三)。
- (12) 玉村竹二編『五山文學新集 第六巻』(東京大学出版会、一九七二)。
- (13) 『續群書類従』第十二輯下 文筆部(續群書類従完成會、一九〇五)。
- (14) 市木武雄『梅花無尺蔵注釈』続群書類従完成會、一九九三。
- (15) 中川徳之助『万里集九』(吉川弘文館、一九九七)。
- (16) 小野泰央『五山文學の自注―『梅花無尺蔵』を中心に―』(『中央大學國文』第五三三号 二〇一〇・三)。
- (17) 内山精也『万里集九と宋詩』(『アジア遊学』漢籍と日本人 九三号 二〇〇六・一一)。
- (18) 『唐才子傳』には、「摘其清平調中飛燕事。以激怒貴妃。」とある。なお、布目潮風・中村喬『唐才子傳之研究』(汲古書院、一九八二)の解題において、日本には五山版として完本が伝わっていたことが説明されている。
- (19) 林田孝和・原岡文字他編『源氏物語事典』(大和書房、二〇〇二)による。
- (20) 前掲吉森佳奈子(注3)や浅尾弘良「准拠の可能性」(『源氏物語の准拠と系譜』翰林書房、二〇〇四)など。
- (21) 金孝淑『『河海抄』の和と漢―『源氏物語』の世界を読み解く―』(陣内英則・横溝博編『平安文學の古注釈と受容』第一集、武蔵野書院、二〇〇八、九)や吉森佳奈子「漢字による和語の注の空間と『河海抄』」(『国語と國文學』第九一卷一―号 二〇一四、一〇)など。
- (22) 以下、『文選』及び「眞娘墓」、「長恨歌伝」は「新釈漢文大系」より引用した。また、「八駿圖」は支那哲學研究會譯註『白氏文集 上巻』(菊地屋書店、一九一一)より引用した。
- (23) 河野貴美子「和語と漢語が紡ぐ文―古注釈を通してみる『源氏物語』と『白氏文集』―」(仁平道明編『源氏物語と白氏文集』新典社、二〇一二)。
- (24) 『日本国語大辞典 第二版』(小学館、二〇〇〇)。
- (25) 『大漢和辞典 修訂第二版』(大修館書店、一九八九)。
- (26) このことについては、中丸貴史先生にご教示を賜った。『文淵閣四庫全書』CD-ROM(迪志文化出版・中文大學出版)による。
- (27) 引用は『李太白文集』(中華書局、一九七七)による。
- (28) 先行する『紫明抄』にも、「尤ヶヶケシ」とある。このことについて、鈴木彰先生・原克昭先生からは、『紫明抄』・『河海抄』に先行する、中世の類書の類の影響なども考えあわせる必要があるだろうとの御助言を賜わった。例えば、『色葉字類抄』には、「尤羽球反ヶヶケシ」とあることなど、さらに考えるべきかと思われる。なお、『色葉字類抄』は中田祝夫・峯岸明編『色

葉字類抄研究並びに索引」(風間書房、一九六四)を参照した。

(29) 柳瀬喜代志『日中古典文學論考』(汲古書院、一九九九)。

(30) 松本大『『河海抄』卷九論―諸本系統の検討と注記増補の特徴―』(『中古文学』第九一号 二〇一三、五)や、同『河海抄』の注記形成と二条良基―『年中行事歌合』との接点から―』(『国語と國文学』九一卷、八号 二〇一四、八)など。

(31) 吉森佳奈子『『河海抄』と説話』(前掲注3) 二五三頁。

(32) 柳瀬喜代志『『長恨歌』『長恨歌傳』と『楊國忠之事』―『太平記』作者の囊中の漢籍考―・『長恨歌』『長恨歌傳』と『楊國忠之事』(續)―『太平記』作者の囊中の漢籍考―』(注29)に同じ。

【付記】 本稿を執筆するにあたり、水口幹記先生に多くの貴重なご教示を賜りました。また林文孝先生には『李太白文集』や漢籍の引用に関しての懇切なご教示を賜りました。厚く御礼申し上げます。

(おおたけあかり 大学院博士後期課程在學生)